

半世紀も前、千九百六十年代前半米國在住の頃、父の仕事の都合により、公立の高等學校より私立の聖心女子學院に轉校せしめられたり。公立の學校は氣樂なりき。聖心にては、學年が異なるにあらずやと思ふほど學習進度が早く、追いつかんがため毎晩夜中の二時や三時まで机に向ふあり。ラテン語さへあれども、轉校してきたれるばかりの身なれば、とりあへず一年目は免除せられたり。一生のうちにて、かくのごとく來る日も來る日も長時間に互り勉強するは初めてなりき。下級生にはロバート・ケネディの娘たちあり。一日歴史の授業にて奴隸制度の話に及び、奴隸制度ありし方が黒人は幸福なりきといふ議論せられたり。この時代にかくのごとき議論を教室にてするとは夢思はざれど、完全に共和黨と民主黨（親の政治志向なりと覺ゆ）に分かれて話進みたり。共和黨側の多くは奴隸制度續きましかば、黒人則ち守られ幸福にてあらまし、といふ。反對側は同じ人間にして人種の異なるのみにて奴隸となすは間違ひといふものなり。喧々囂々議論ありて後、突然「ケイコはここで唯一アジアの人間なれば、どう思ふや述べよ」と先生より指名あり。仰天すれど、いかんともすべなし、「同じ人間が他の人間を奴隸にするは人権を奪ふに異ならず。かくのごとき惡のあるべからずと思ふ」と返答したり。さはさりながら、數年前總括したる若者のための國際會議に於て、宣言文を作成中、人間は平等なりと言ふ議論になりき。アフガニスタンの青年は「自分は生まれし時より常に戰亂の中にありき、人間平等なりとは思ふにあたらず」と發言し、南アフリカの青年は「生まれし時より差別せられ、平等などはこの世にあらず」と言ひき。熟々考ふるに地球上において人権の尊重せられざる昨今、昔にも變はらざるにあらずや。